

長岡市子育ての駅千秋「てくてく」＋千秋が原南公園＋信濃川桜づつみ遊歩道

正会員 木村博幸君

正会員 山下秀之君

正会員 江尻憲泰君

長岡駅から車で約10分、市街地を抜けると豊かな自然が広がる雄大な信濃川が見えてくる。この信濃川の河川敷には桜づつみに沿って、老人ホーム、病院、専門学校、県立近代美術館、長岡リリックホール、長岡造形大学などの公共的、文化的な施設が点在し、市民の生活を支援するとともに憩いの場、活動の場となっている。本建築はそのような環境の中に建つランドスケープと一体となった子育て支援施設である。

この建築の優れた点は以下のとおりである。

一点目は、行政間の枠を越え河川敷全体をアースワークとして計画し、建築と公園と土手と遊歩道が一体化している点である。通常、公園、建築、土木は管轄が違うことからそれぞれ別発注となるため、一体化は難しい。この計画では、その壁を乗り越え、設計者の提案を各行政が真摯に受け止め協力することで、一体化を実現している。公園には水遊びもできる小川のせせらぎや「えんえん」と命名された遊びのステージが設けられ、子供たちのアクティビティを誘発している。「えんえん」は、市民検討委員会の中で出た市民の要望を受け止め実現する装置として計画されている。要望は多岐にわたるとともに、その要望は将来変化する。用意された大中小3つの円は、森や竹林、花見、水場、菜園、丘のような遊び場としての利用など、様々なプログラムに対応可能なフレキシビリティに富んだ場であり、様々な風景を生み出す。この設えと建物から延びた公園そして桜づつみの土手へと続くクロソイド曲線を描く遊歩道の軸線が、建築とランドスケープを融合し、豊かな空間を創り出している。

二点目は、雪深い冬、子供たちの活動が制限されてしまう長岡に、冬でも元気一杯に活動できる「子供たちの遊び場」を実現した点である。○△□の幾何学で構成された平面は、ともすれば活動を規定してしまいがちであるが、中庭の設置による回遊性、○の空間に挿入された小屋のようなデン空間、ひと繋がり空間などが様々な活動の場を生み出し、使い手の活動を誘発する空間となっている。

三点目は、様々な活動の場を使用するスタッフの工夫である。子供たちの自由な遊びの場、親子同士保護者同士の交流の場、そして冬でも体を動かせる運動場という通常の活動のほか、○のゾーンを円形劇場と見立てた子供たちのためのミュージカル、ミニコンサート、絵本の読み聞かせ会、△の交流ゾーンでのリース造りのワークショップなど、様々なイベントが企画され、多くの人々が参加している。

開館1年目は20万人の利用者があり、全国からの見学者も多く、現在でも予想を超えた利用者数を保持しているという。審査当日も雨でとても寒い日であったが、多くの子供たちと親が訪れ、活発にかつ楽しそうに活動していたのが印象的だった。

以上のように本建築は、設計者が生み出した空間を、運営者や利用者が様々な工夫で活かすことで、人々に愛される場となっており、これからも活発に使い続けられる要素を持った優れた建築である。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。